

域から見れば、外在的な観点から分析がおこなわれることが避けられなかったのではないのでしょうか。そもそも地域研究は、その研究主体が所属しない地域を外在的に研究するということを使命にして成り立っていると考えれば、当たり前なのかもしれません。

ただ、このような問題は、今後、やはり何らかのかたちで再検討されなければいけないのではないのでしょうか。東洋史学の方法も、根本的に外在的な学問的方法と考えられるものを、いわゆる「東洋」(オリエント)に当てはめようとしたものだったのかもしれない。

では今後、中国または対象とする研究対象地域に、内在的な何かの方法があらためて発見されるのかどうか。中国については、それが「シノロジー」や「支那学」といわれたものと、どこかでつながったようなものになるのかどうか。または、さらにそれをもっとさかのぼって、中国の固有の伝統文化のなかにあって、漢学などにつながるような何かを求めなければならないのかどうか。そのへんは、私自身もまだよくわかりませんが、対象地域に内在的に学問研究をするということ自体がどのようなことなのか。われわれが持っている方法は、ほとんど西洋から来た方法であり、そういうものを使ってやっていると思わざるを得ないと、こんなことを考えさせられています。雑駁ですが、以上で終わります。

●—司会 それでは次に、神奈川県名誉教授の小林一美先生をお願いします。

●—小林一美 小林です。私はちょうど日中戦争、盧溝橋事件や南京大虐殺といわれる事件を日本軍が起こした1937年に生まれました。そして1957年に、今は廃校になりました東京教育大学の文学部東洋史学科に入学し

ました。それから中国史を研究しながら、大学では世界史を学生に教えてきたという経歴を持つ人間です。その自分の歴史をふり返って、加々美先生の論文を読んだ感想を述べたいと思います。

まず、私が学んだ東洋史学が現代中国学と無縁な関係にあったか、またそれは何故かについて語ってみたいと思います。1957年に大学の文学部東洋史学科に入学したころ、中国近代史を学び卒業論文を書くのは、何か恥ずかしい気分でした。私は、実際は近代史、現代史を大威張りでやりたかったのですが、前近代と近現代の境目である19世紀の中国の農村社会、農民運動の研究ということでお茶を濁したわけです。なぜ、そのような恥ずかしい気持ちが起こったかと言いますと、当時の教室の雰囲気は、近代史、現代史は研究対象が流動状態にあり、またときの政治情勢、日中関係の変化などによって、研究主体の価値観と研究対象が絶えず変化していたからです。厳密な史料批判もできず、客観的な検証や価値判断ができません。したがって、評論家風の時局論に終わらざるを得ないといった雰囲気でした。

私が尊敬しておりました中国古代史の恩師は、「人民中国の歴史研究は全体的に水準が低くて、学問的には評価できない。史料の編纂事業だけは別だが」と言っておりました。このような雰囲気は当時一般的でした。その理由を考えてみますと、1つには「日本の東洋史学は世界に冠たるものであり、本家の中国に勝る」といった戦前から日本東洋史学が持っていた優越感がありました。1950年代中ごろ、京都大学の東洋史学教室におられた森正夫氏の回想記にも、東洋史の先輩方がこのような自慢話をしていた話が出てきます。

もう1つ、当時の中国の歴史学者は共産党

の政治宣伝下にあったため、極めて幼稚な階級闘争史観を振り回していたにすぎず、先生方はあまり学生がそれになびいて赤旗を振り回したりすると困るという心配を持たれていたと思います。私の友人には共産党に入った人も多く、新島へ行って赤旗を振ったり、逮捕されたりする者もおりまして、先生方はそのようなことをとても心配されておりました。

このような感情は、1980年代から急速に変化しましたが、いまだに日本の東洋史学の中に優越感が残っています。また、並木先生もおっしゃいましたが、大陸進出を前提にして、朝鮮半島、中国西北部や中国周辺の歴史地理学などから、日本の東洋史学は始まるわけです。

はじめは朝鮮、旧満州やモンゴルなどの地理や歴史の研究をして、それをドイツ語に翻訳して、欧米の大学に配布するということをしてきました。日本の東洋史学は、欧米の研究に負けてはいないことを証明しようという明治期の日本の学者の気持ちから出発するわけです。

戦後日本では、マルクス主義歴史学が全盛のようになりました。若手を中心にして、中国史の中にも「世界史の発展法則が貫いている」「アジア的停滞性理論を打破しなければならない」という気分が蔓延しておりました。そのような動機のもとに、階級関係や生産関係の転換に基軸を置いた「歴史発展の時代区分」を定めることが、正当な目的論的価値判断に基づく研究であり、歴史を段階的発展、生産力と生産額の矛盾によって、新しい社会構成体に転換していくという因果関係を明らかにするのだという気持ちで、階級関係を重要視するマルクス主義歴史学に、私なども大いに心を躍らされたわけです。

歴史学研究会の委員もやり、遠山茂樹、大田秀通、和田春樹、梶村秀樹らの諸先生方と一緒に仕事をやりました。ちょうど大学院時代でしたが、政治意識も鋭い彼らの真面目さに大いに感銘を受けました。歴史学研究会を中心とする唯物史観の考えに反対する人たちが、中国中世史の研究者の京都大学の川勝義雄さんや谷川道雄さんというような方々です。「階級」ではなくて「共同体」の歴史的展開によって中国史を明らかにしようとする情熱を燃やして、谷川先生などは現在でも孤軍奮闘されているようです。1970年代ごろから、階級闘争史観も倫理共同体史観も影響力を失ったように思っています。

最近の中国史研究は共通の問題意識、研究目的や理論法を持たない状況下にあります。客観性を誇るというようなことしかないのでしょうか。現代に生きる目的なく、価値判断なき中国史研究が、客観主義を標榜して主に行なわれているような感じを受けます。

以前は中国社会主義に未来があると思いましたが、それにはもう大した未来がないということが明らかになりました。中国はどうか。どうなるのかは、歴史家にはわかりません。誰にもわかりません。文化大革命が起こる前に、それを予想した中国の学者がいたのでしょうか。また、スターリン (Iosif Stalin) やヒトラー (Adolf Hitler) というような人間が出てくることなど、1920年代にはほとんどの人が予想しなかったわけです。これから起こることも含めて人間の行為は歴史の中に総て出つくしているという命題と、これから起こることを人間は予測し得ないという命題、この絶対矛盾の狭間に我々はいるのです。羽仁五郎は、人類の歴史はアウシュビッツ以前と以後に分かれると言いました。歴史はそこで折り返し点に、つまり往路から

復路に変わったのです。21世紀ほど人が人を殺した時代はなく、人間の何たるかの極限形態を示したのです。現代中国論は、そうした人類史的規模の中で考えたいと思います。現存の「国家」を前提にした学問区分は、学問にならないのではないのでしょうか。

大学院時代に私と一緒に長く学んだ女性に、加々美先生の論文を読んでもらったところ、「どうも欧米人の学問書、学説書を表層的にあまりにありがたがって勉強しすぎているのではないか、難解な横文字が空虚に宙に浮く感あり」、「もう少し日本人の歴史や文化、現代社会における矛盾の基層から発する問題意識を踏まえた自己の言葉や概念に基づく発想ができないだろうか」などと言っていました。私も賛成するところがあります。我々は「無」から普遍的学理、新しいパラダイムを世界に発信することはできません。中国人の「現代中国学」と日本人のそれとは、同じものになるとは思いません。日本人が発する学問の課題、思考の枠組み、概念や理論は、日本人の学問的蓄積、独自の発想から提起されるべきだと思います。例えば、私は学生時代に梅棹忠夫が「文明の生態史観序説」を発表しまして、大変感激しました。中尾佐助・佐々木高明の「照葉樹林文化論」、また梅棹忠夫の説を批判的に継承した川勝平太の「文明の海洋史論」、私が日本の哲学者で偉大な人だと思っている梅原猛の仏教史論、縄文文化論、アイヌ論などからなる「日本学・東洋学」、そのような蓄積から発する学問的射程の中で「現代中国研究」ができないだろうかと思うのです。簡単な現状分析の「現代中国学」ではなく、深い文化文明の堆積した歴史的地層の中から「現代中国学」ができないのでしょうか。では、「おまえがやればいけないのではないか」と言われますと、なかなかで

きないから、このようなところで発言するにとどまるわけですが、何かそのようなことができないのだろうかと感じます。

私の具体的な提案は、お恥ずかしい限りですが、お手元のパンフレット（本報告書259～264ページ）に書きました（A）（B）（C）（D）くらいのことを考えているだけですが。以上、大ざっぱな問題提起に代えさせていただくということで、中途半端ですが終わりにしたいと思います。失礼致しました。

●—司会 次のコメンテーターは、南開大学の江沛先生です。先生は先月末まで、本学国際中国学研究センターの訪問教授として滞在されておりました。今回は、シンポジウム出席のため、急遽、再来日していただきました。それではお願いします。

●—江沛 前面很多学者做了精彩的发言，到我这里已经越来越难讲了。我是研究中国近现代史的，我还是要从自己研究历史的角度上谈谈对加加美老师论文学习的体会。

第一点想法，中国学需要共同态度性。正像加加美教授讲的那样，11世纪以后形成的欧洲汉学，重点在于对中国古典文献的研究以及对中国文化的介绍和研究上，在1940年代以后兴起的中国研究（Chinese Studies），它实际上关注的是中国社会怎样从农业社会向工业社会转型的这样一个过程，重点是在这个方面，因此，对于这样一个过程，我们首先应考虑一下中国人对这个过程是怎样看的。中国近代是在西方的炮火下展开了转型的过程，一方面我们要打倒西方的统治，进而获得民族的独立，这是一个根本的宗旨，后来也形成了中国社会反帝（即反对外来侵略）这一历史性的主题；另一方面，中国社会在被西方列强打开大门以后，开始逐步接受了现代性的思想，因此很多知识分子意识到从中国传统文化自身很难产生这种现代性，必须要学习西方，这就出现